

【講演会】

無常の世界

——不離叢林——

片 山 一 良

行持の至妙は不離叢林なり

正法眼蔵 行持

はじめに

本日は、このような伝統のある愛知学院大学にお招きいただき、誠に有難うございます。禅研究所所長の岡島秀隆先生、また直接お話を頂戴しました引田弘道先生に厚く御礼申し上げます。このモダンな明るいお部屋、またここから見えます紅葉の美しさは格別であり、今ここにすばらしい人間と自然との調和を実感させていただいております。これまで私はパーリ学関係の仕事をしてきましたため、

無常の世界（片山）

まもなく一周忌をお迎えになる前田惠學先生のところへお邪魔させていただく以外、こちらへ伺いする機会はございませんでした。しかし、本研究所の吉田道興先生とはかつて駒澤大学の同級生であり、また学長の大野榮人先生とは大谷大学の大学院で学び、また伊藤秀憲先生とは駒澤大学仏教学部の同僚ということで、長くご法縁をいただいております、その意味でこちらには懐かしさのような不思議な因縁も覚えております。いずれにしても、このような貴重な機会を頂戴しましたことは有難く、諸先生ならびにお集まりの皆様にも、深く感謝申し上げます。

さて、これから、『無常の世界——不離叢林——』と題しまして、お話をさせていただきたく存じます。その内容は、

大きく言えば、「仏教」とは何かです。つまり「仏法」とは何か、「仏道」とは何かであり、さらに言えば、「禪」とは何か、ということでもあります。それを、「無常」と「不離叢林」をめぐって考えてみようというものです。

では、なぜ「不離叢林」か、といえますと、約三年前に遷化された永平七十八世・宮崎奕保禅師の「慕古真心 不離叢林 末後端的 坐断而今」というご遺偈に接し、その言葉に惹かれたからであります。周知のとおり、仏教は、その一般的な感覚からしますと、「離」とか「不」とか「無」という言葉を尊重しております。ですから、「不離叢林」と言えば、叢林を離れないこと、つまり辞書によれば、「叢林」は輪廻、修行道場、精舎などの意味を持ちますから、「輪廻」を離れないこと、「修行道場」を離れないこと、あるいは「禅院・教団・精舎」を離れないこと、というように理解されるでありましょう。しかしそれでは、いわゆる無所得、無住処涅槃の言葉に、つまり「無常」の教えに対立してしまいます。「無常たのみがたし、しらず露命いかなるみちのくさにおちむ、まことにあはれむべし」とのよく知られた言葉にもあるとおりです。では、

この不離叢林をどのように考えるべきか、祖師方は、とくに道元禅師はどのように考えられたか、です。「無常」は「不離」、あるいは「不離叢林」と対立するのかどうかであります。

仏教

これより、まず「仏教とは何か」について見てみましょう。パーリ仏典、つまり原始仏典の『大般涅槃經』に、つぎのような言葉があります。

（仏辞世句）

「いかなるものも移ろい行く。怠ることなく努めよ」

（長部第16『大般涅槃經』^③）

これは、「仏教」とは何か、が見事に語られたものと言えます。釈尊が入滅される最後の言葉、いわゆる辞世の句とされるものです。前後二句からなりますが、伝統仏教の解釈では、前半は仏の教え、「仏法」を、後半は仏の実践、「仏道」を示されたものとされます。

仏教の聖典には無数のお経があります。八万四千の法門とも言われますが、そうしたお経の中に、「教え」を代表

するもの、「実践」を代表するものは何か、と問われたならば、前者についてはいわゆる「無常偈」であると、後者についてはいわゆる「七仏通誠偈」であると答えることができましょう。

A. 仏法「いかなるものも移ろい行く」

まず、仏の教え、仏法の根本を説いている「無常偈」を見ることにしましょう。つぎのような大変よく知られた偈です。

(無常偈)

「諸行は実に無常なり (諸行無常)

生じ滅する性質のもの (是生滅法)

生じてはまた滅しゆく (生滅滅已)

その寂滅は安樂なり (寂滅為樂)

(長部第16『大般涅槃經』⁴)

これは、釈尊の入滅直後にサツカ天(帝釈天)が唱えたものとされます。どのように「教え」を代表するかといいますと、その内容が諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜という「三法印」を、その根幹に「縁起」を、また「四聖諦」を

無常の世界(片山)

説いていると見られるからです。もちろん他の「教え」も同じ趣旨ですが、この無常偈は特によく調和がとれていると思われまます。

諸行という五蘊、自己、またその世界は無常であり、生じては滅するものである。諸行といういわば意思において、欲を出さず、我執がなければ、欲や執着による生まれも老いも病も死もない。内にも外にも対立がなく、貪りも怒りも愚痴もない。苦はない。つねに自由であり、寂滅という完全な静まり、涅槃を見る、ということです。一般にも、かの弘法大師が作られたともされる「いろは歌」に、「色は匂へと散りぬるを(諸行無常)、わが世たれぞ常ならむ(是生滅法)、有為の奥山けふ越えて(生滅滅已)、浅き夢みじ酔ひもせず(生滅滅已)」と詠まれ、知られているとおりです。このように、この「無常偈」は教えの全体を示すものと言えるでありません。

B. 仏道「怠ることなく努めよ」

つぎに、仏の実践、仏道の根本を説いている「七仏通誠偈」を見ることにします。これはヴィパッシー仏(毘婆尸

仏）から釈迦牟尼仏にいたる過去の七仏がだれも教誡されたというものです。パーリ仏典によれば、この七仏通誡偈は三偈からなりますが、一般にはつぎの第一偈のみと見做されております。

（七仏通誡偈）

「いかなる悪も行わず（諸悪莫作）
もつばら善を完成し（衆善奉行）

自己の心を淨くする（自淨其意）

これが諸仏の教えなり（是諸仏教）」

（『法句』第183偈）

これもよく知られた偈ですから、『正法眼蔵』「諸悪莫作」の巻にも引かれております。唐の白居易が道林（鳥窠）禪師に問います。「仏教の大意はどのようなものでしょうか」と。禪師は言います、「諸悪莫作、衆善奉行である」と。すると白居易が言います、「それならば、三歳の小児でも言いええます」と。すると禪師は、「たとえ三歳ある」と言い、白居易は拝謝し去った、というものです。この句の説くところは、悪いことをしない（諸悪莫作）、

善いことをする（衆善奉行）、自己の心を淨める（自淨其意）、これが諸仏の教えであり（是諸仏教）、ここに聖なる道がある、ということ。その四句のうち、前半の三句は直接の教えであり、順に戒・定・慧の三学、ないし八正道を説くものでありますが、後半の一句はそのまとめです。戒は五戒を根本とするものであり、「不殺生」「不偷盜」「不邪淫」「不妄語」という他者を尊重する慈悲、および「不飲酒」という自ら放逸と妄念に耽ることのない智慧、この両者による生活をいいます。そのような戒に基づいて第二句の定という心の静まりが実践され、それによって第三句の智慧による洞察が行なわれる、止観によって自己は清まるといいます。どの仏も智慧と慈悲による実践をこの三偈にまとめられたと言えましょう。⁷⁾

（三観偈）

「あらゆる行は無常なりと 智慧をもって観るときに
かれは苦を厭い離れる 此れ清淨にいたる道なり」

「あらゆる行は苦なりと 智慧をもつて観るときに

かれは苦を厭い離れる これ清浄にいたる道なり」

「あらゆる法は無我なりと 智慧をもつて観るときに

かれは苦を厭い離れる これ清浄にいたる道なり」

(法句 277—279⁸)

以上の三偈が示すものは、智慧による「観」(vipassana ヴィパッサナー)、無常・苦・無我の三相に載せて五蘊なる自己を観察する道です。ここに言われております「清浄にいたる道」とは「観」であり、「清浄」とは究竟清浄の「涅槃」のことです。この実践はいわゆる「覚り」のためにつねに行なわれるものです。止観の「止」(samatha サマタ)は禪定であり、心の静まりのために不可欠な実践ですが、入定している間の一時的な解脱です。しかし、この「観」は智慧による不時の解脱、すなわち覚りにいたる不可欠の実践であります。

(1) 法にも執さず — 筏の喩え —

さて、仏はいかなるものにも、非法はもちろん、たとえ法でも執着してはならない、と教えられました。たとえばパーリ仏典に「筏の喩え」をもつてこう説いておられます。

無常の世界 (片山)

す。

「比丘たちよ、どのようにすれば、その人はその筏について行なうべきことを行なう者となるのでしょうか。比丘たちよ、ここで、岸へ渡ったその人がこのように考えたとします。へこの筏は私に役立った。私はこの筏により、手足でもって努力し、無事に岸へ渡った。私は、この筏を陸地に引き上げるか、水に浸けるかして、好きなところへ出発してはどうであろうか」と。比丘たちよ、このように行なえば、その人はその筏について行なうべきことを行なう者になるはずで

す。比丘たちよ、このように私は筏に喩えられる法を説きますが、それは渡るためであつて、捉えるためではありません。比丘たちよ、そなたたちに説かれた筏に喩えられる法を理解し、そなたたちはもろもろの法をも捨てるべきです。ましてや悪法についてはなおさらのことです」 (中部第22『蛇喩経』⁹)

これは、いわゆる「法執」という法への執着に対する戒めでありますが、ここでは止観という法にも執着してはならない、としたものです。大乘仏典の『金剛般若経』に

も、

「如来は常に説けり、『汝ら比丘よ、わが説法を筏の
喩えの如しと知る者は、法すらなおまさに捨つべし。

いかに況や非法をや』^⑩

と語られているとおりです。

これから、私たちは、仏が「たとえ法であつてもこれに
執着してはならない」と教えられていることをよく知らね
ばなりません。

(2) 語れば法、黙せば禅

つぎに、仏弟子による集まりの生活において何が大事な実
践であるか、仏はこう教えておられます。

「比丘たちよ、そなたたちが集まる時、二のなすべ
きことがあります。すなわち法の話と聖なる沈黙で
す」
(中部第26『聖求経』^⑪)

これは、集まりにおいて、話をするのであれば、法に關す
る話（法談）をすべきである、世間話に耽つてはならな
い、ということです。また、沈黙するときは、聖黙、すな
わち坐禅并道に努めよ、いかなる時処も無駄にしてはなら
ない、ということです。

(3) 世界はこの一尋の身

つまり、それは一日、二日のことでも、一年、二年のこ
とでもない。生涯にわたることだということです。しか
も、それを自己の身心において努めよと言われておりま
す。たとえば、つぎのような『赤馬経』の赤馬天子と仏と
の問答にそれが窺えます。

(天子)「尊師よ、その私にこのような欲望が起こりま
した。(私は歩行によって世界の終わりを極めること
にしよう)と。尊師よ、そこで私はこのような速力を
そなえ、またこのような足の歩幅をそなえ、食べる、
飲む、嘔む、舐めるとき以外、大小便をするとき以
外、眠気と疲労を除くとき以外、百歳の寿命があり、
百年を生き、百年の間、歩きつづけました。しかし、
世界の終わりを極めないまま、途中で死んでしまいま
した。

尊師よ、不思議なことです。尊師よ、珍しいこと
です。尊師よ、世尊がそのように、『友よ、私は、生ま
れることのない、老いることのない、死ぬことのない、
没することのない、再生することのない世界の終

わりを、歩行によつて、知る、あるいは見る、あるいは極めることができる、とは説きません」と、よくお説きになるとは。

(仏)「しかし、友よ、私は、世界の終わりを極めないまま、苦の終わりを作ることを説きません。友よ、私は、想があり、意がある、このわずか一尋ひとぶらの身体における、世界と世界の生起と世界の滅尽と世界の滅尽にいたる行道とを説くのみです。

世界の終わりは歩行によつて
けつして極められ得ない

世界の終わりを極めなければ

苦から解放され得ない

それゆえ世界を知る賢者

梵行修めた世界の達人

寂者は世界の終わりを知つて

この世あの世を願ひ求めず」と。

(相応部「有偈篇」)

大変興味深いお経です。この一尋の、六尺の身が世界だ
というのです。眼や耳などの六根によつてすべてを知りう

無常の世界(片山)

る世界のことです。いつでもこへ行こうと、この身心がついて回るので。世界はこの身心の世界でしかありません。この身心が調御できるならば、世界はすべて収まる、静まるということです。自己を知る、すなわち、自己という五蘊が苦であり、それが集という渴愛によつて生じ、また、八正道によつて苦も集も滅する、すなわち苦滅の樂、涅槃を知り、世界の一切を知る、ということ。

C. 不離叢林の行持

さて、パーリ仏典から知られる仏の教えと実践との概観が終わりました。これから禅籍、とくに『正法眼蔵』に知られる不離叢林の行持について窺うことにしましょう。

(1) 自己の脱落身心

まず、『永平清規』の「辨道法」の冒頭部分を見ることにします。

「仏仏祖祖、道にありて辨じ、道に非ずして辨ぜず。法あれば生じ、法なければ生ぜず。ゆえに大衆もし坐すれば衆に随つて坐し、大衆もし臥すれば衆に随つて臥す。動静大衆どうじやうに一如いちにし、死生叢林を離れず。群を

抜けて益なく、衆に違ずるは未だ儀ならず。これは是れ仏祖の皮肉骨髓なり。亦すなほ自己の脱落身心なり。然ればすなはち空劫已前の修証なり、現成に拘はるなし。朕兆已前の公案なり、未だ大悟を待たず」

（『永平元禪師清規』**辨道法**）

これは、仏祖は道を行じ、非道を行じることがない、そこには辨道の法があり、仏はその大道を行く、坐禪をする、と言われたものです。それゆえ、大衆は行・住・坐・臥の四威儀について、とくに坐について、つねに一如に行じること、それが不離叢林であるということです。もし独り大衆と離れて抜群の行動をするなら、何も益がない、慢心を生むのみ、仏の伝統ではない。この道は生涯にわたる行道であり、それはまた空劫已前の修証、公案である、と。ここでは不離叢林が脱落身心、坐禪、公案であると言われるております。

(2) 脱落なる全語

つぎに、不離叢林を「脱落なる全語」、一切の沈黙、「聖なる沈黙」として示された説示があります。少し長い引用になりますが、以下に紹介します。

「あるとき、衆にしめしていはく、『你もし一生叢林を離れず、不語なること十年五載ならんには、人の你を喚んで唾漢と作すことなけん、已後には諸仏もまた你を奈何ともせざるなり』。これ、行持をしめすなり。しるべし、十年五載の不語、おろかなるに相似せりといへども、不離叢林の功夫によりて、不語なりといへども唾漢にあらざらん。仏道かくのごとし。仏道声をきかざらんは、不語の不唾漢なる道理あるべからず。

しかあれば、行持の至妙は不離叢林なり。不離叢林は脱落なる全語なり。至愚のみづからは不唾漢を知らず、不唾漢をしらせず。何誰か遮障せざれども、しらせざるなり。不唾漢なるを得恁麼なりときかず、得恁麼なりとしらざらんは、あはれむべき自己なり。

不離叢林の行持、しづかに行持すべし。東西の風に東西することなかれ。十年五載の春風秋月、しらざれども声色透脱の道あり、その道得、われに不知なり、われに不会なり。行持の寸陰を可惜許なりと参学すべし。不語を空然なるとあやしむことなかれ。入之

一叢林いちそうりんなり、出之一叢林しゅいつしなり。鳥路一叢林ちうろいちそうりんなり、徧界一叢林へんがいいちそうりんなり」
〔『正法眼蔵』行持・上〕¹⁴

これは、趙州和尚が示された「不離叢林」について述べられたものです。汝が一生叢林を離れなければ、物を言わず五年、十年が経つても、誰も唾者、物言わぬ者だ、とは言わない。そうなれば、諸仏もどうすることもできないであろう。そのように「物言わぬ者」は愚か者のようであるが、不離叢林の功德によつて物を言わないのである。仏の出す声、仏法の話を受けない者に、この「物言わぬ者」の道理が分かるはずはない、というのです。それゆえ、行持の不思議な極妙のところは不離叢林であり、不離叢林は脱落の全語、脱落した一切の言葉、沈黙の言葉の一切、お経の一切である、ということです。愚かな者は、その沈黙を知らないし、それが得んば、すなわち如是の者であり、仏であることを知らない。まことに憐れむべきことだ、というのです。

また言われました。この不離叢林の行持は静かに行なうべきであると。あちこちに吹く風にまかせてはならない。不離叢林という無風を知れというのです。無風の言葉があ

無常の世界（片山）

る、たとえその言葉が自分に分からなくとも、光陰を惜しみ、行持に励むべきである。沈黙を空しいものと思つてはならない。入るのも出るのも一叢林であり、どこも叢林でないところはない。見えない鳥の路も、どこもこれも全世界は叢林ばかり、ということだ。

(3) 兀坐不道

つぎは、不離叢林が「兀坐」、「坐禅」によつて通じる、と述べられたものです。

「一生は所從來をしらずといへども、不離叢林ならしむれば不離叢林なり。一生と叢林の、いかなる通霄路つうしやうろかある。ただ兀坐ごつざを辨肯べんこんすべし。不道をいふことなかれ。不道は道得の頭正ずしんびしん尾正びしんなり。兀坐は一生、二生なり。一時、二時にあらず。兀坐して不道なる十年五載あれば、諸仏もなんぢをないがしろにせんことあるべからず。まことにこの兀坐不道は、仏眼ぶつげん也ちよふけん不見みえなり、仏力ぶつりき也けんき牽けん不及ふきなり。諸仏しよぶつ也なにか不奈ふな你何なにかなるゆゑに」
〔『正法眼蔵』道得〕¹⁶

一生というものは、どこから来たのか分らないが、叢林を離れていないから不離叢林である。一生と叢林の間は親

密であり、その通路は兀坐、不動の坐禅でしかない。それは無言、沈黙であり、言い得る言葉の全体であり、真実の言葉の表現である。兀坐は一生、二生のものであり、黙って五年も十年も坐れば、諸仏もこれを蔑ろにすることはない。この沈黙の坐禅は、仏の眼にも見えないし、仏の力でも動かしえない。諸仏も汝をいかんともすることができない。不離叢林とは兀坐である、不離道得である、ということです。

(4) 転法輪

さらに、つぎのように、転法輪が一生不離叢林である、とも語っておられます。

「転法輪といふは功夫参学して一生不離叢林なり、
長連床 上に請益辨道するをいふ」

〔『正法眼蔵』転法輪〕⁽¹⁷⁾

これは「転法輪」巻の最後の言葉であります。転法輪という説法が、一生不離叢林であり、功夫し、参学し続ける仏道であることをいうものです。それは長床、単における坐禅であり、仏道に励むことだということです。「仏経」の巻には、第二十七祖般若多羅尊者の言葉を引いて、「貧道

は出息衆縁に随はず、入息蘊界に居せず。常に如是経を転ずること、百千万億卷なり」と述べておられます。それはまた、転法輪が自己の息の出し入れにあり、仏道を行く者は、いつも一息に経を説く、今ここに坐禅をする、ということであります。

また、『普勸坐禅儀』において、つぎのように言われました。

「何ぞ自家の坐床を忘却して、謾りに他国の塵境に去来せん。もし一步を錯れば当面に蹉過す。既に人身の応会を得たり。虚しく光陰を度ることなかれ」⁽¹⁸⁾

と。これは、自己を忘れ、どこに坐ろうと、何の益もない。先の教えのとおり、外の対象にも従わず、内の自己にも捉われない、これが不離叢林、坐禅だということです。あちこち、うろろう、するな、一筋に生きよ、ということでありましょう。

以上から、道元禅師の言われる「不離叢林」は、坐禅であり、沈黙であり、お経であり、転法輪という説法である、ということが知られます。

D. 無常の世界

さて、「無常」と「不離叢林」についてどのように考えられるか、であります。

(1) 観無常

無常ということについて、『学道用心集』の冒頭にこう言われております。

「菩提心を発すべき事。右、菩提心は、多名一心なり。龍樹祖師の曰く、ただ世間の生滅無常を観ずる心もまた菩提心と名づく。然ればすなわち暫くこの心に依つて、菩提心となすべきものか。誠にそれ無常を観ずる時、吾我の心生ぜず、名利の念起らず、時光の太だ速かなることを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふ」⁽¹⁹⁾

と。

龍樹祖師によれば、菩提心とは世間の生滅を見る心であり、無常を観る心です。無常を観ることは、世間、世界、すなわち自己を知ることには他なりません。無常を観るとき、一切の我執は起こらず、輪廻の恐怖を知る、ということです。『正法眼蔵隨聞記』にも、

無常の世界（片山）

「念々止まらず、日々遷流して無常迅速なること、眼前の道理なり。知識経卷の教へを待つべからず。ただ念々に明日を期することなかれ」⁽²⁰⁾

と、説かれています。無常迅速の道理は知識経卷の教えを待つまでもない。無常の世界、無常の自己を知り、今ここに精進すべきである、ということなのです。

(2) 二諦の説法

仏の教えは甚深微妙であり、まことに見難いものです。そこで、仏は、以上のように諸法の生滅変化による無常を見て、順々に精進すべきことを説かれました。しかし一方で、仏は、諸法の実相を見て、即刻即座に精進すべきことをも説かれました。

世界非世界

たとえば、『金剛般若経』につきのような言葉が数多く見られます。

「如来は、世界は世界に非ずと説き、これを世界と名づく」⁽²¹⁾

と。この世界・非世界・世界はどのように解されるのでしょうか。世界は皆空の世界でない、諸法の世界である。

また、世界は諸法の世界でない、皆空の世界である、ということになります。如来はすべてのものを皆空、すなわち空相をもつて見る、知る、説く、ということです。また、よく知られている「応無所住而生其心⁽²²⁾」という言葉もあります。これが、これと同じように解されましよう。真実の心、無欲の心、仏の心を生じることです。

諸法実相

また、『法華經』には、「唯仏与仏」で知られるつぎのような言葉があります。

「仏の成就せる所は第一の希有難解の法にして、唯だ仏と仏とのみ、すなわちよく諸法の実相を究め尽せばなり」
(方便品⁽²³⁾)

仏の言葉は、仏の間で語り合うもの、ただ覚った者のみが知りうるものである。無欲のことは、無欲者のみを知るもの、欲のある者には分からない、ということ。趣旨は先の場合と同じです。欲のある者は諸法のみを見ますが、無欲の者は諸法の実相を見るのです。如来は、諸法実相を知り、つねに実相を見て、説く、ということでありま

このように、お経の言葉は、大きく言えば、諸法によるものと、実相によるものが知られます。仏は、どのお経も、諸法と実相によって示されました。それについて、龍樹尊者は『中論』の中でつぎのようにまとめておられます。

「諸仏は二諦によって 衆生のために法を説く
一には世俗諦を以てし 二には第一義諦なり」
(観四諦品⁽²⁴⁾)

と。つまり、仏は、教えを、世間、世俗の言葉で説かれ、またそれをいわば一つの言葉で、真実の相を捉え、実相としても示されたということです。世俗諦とは諸法を、第一義諦とは実相を示す真理ということです。勿論、この見方はパーリ仏典の諸註釈にも知られます。道元禪師も、これについて、

「いはゆる経巻は、尽十方界これなり。経巻にあらざる時処なし。勝義諦の文字をもちる、世俗諦の文字をもちる、あるひは天上の文字をもちる、あるひは人間の文字をもちる、あるひは畜生道の文字をもちる、あるひは修羅道の文字をもちる、あるひは百草の文字を

もちろん、あるひは万木の文字をもちゐる」

『正法眼蔵』 仏經⁽²⁵⁾

と述べておられます。世俗諦は差別され、名前がついたもの、勝義諦は差別のないもの、別に言えば不離叢林であります。

(3) 尽十方界、沙門全身

たとえば『從容録』(第四則)に、「世尊、衆と行く次で、手をもって地を指さして云く、この処に梵刹を建つべし。帝釈、一茎草をもつて地上に挿んで云く、梵刹を建つること已に竟りぬ。世尊微笑す⁽²⁶⁾」とあります。面白い話です。仏が大衆とともに行き、手で地を指差して「ここに梵天宮を建てなさい」と言われた。そこに帝釈天が現われ、一本の草を地に挿した。すると梵天の宮殿が建てられ、仏は微笑された、というのです。仏の指も、言葉も、地も、また帝釈天の一茎草も、梵天宮も、すべて自己であり、自己の世界にほかなりません。諸法実相を示しております。坐禅であります。

同じことは、『正法眼蔵』(十方)のつぎの言葉にも知られます。

無常の世界(片山)

「尽十方界は沙門全身。一手は天を指す是れ天、一手は地を指す是れ地。然も是の如くなりと雖も天上天下唯我独尊。これ沙門全身なる十方尽界なり」⁽²⁷⁾

これは長沙禪師の言葉とされます。十方世界の全体が沙門の全身である。さす指一本が天であり、地であり、天上天下唯我独尊の仏、すなわち自己の世界であるというのです。

また、『正法眼蔵』(光明)などに述べられている言葉も同じです。たとえば、

「而今の髑髏七尺、すなはち尽十方界の形なり、象なり。仏道に修証する尽十方界は、髑髏形骸、皮肉骨髓なり」⁽²⁸⁾

とあります。この髑髏からなる自己、この五蘊、この六根、この身心がそのまま仏道の世界だということです。すでに仏が説かれた赤馬天子の教えに知られるところです。

(4) 一日の行持

仏の教えはこのように世俗諦と勝義諦によって、あるいは諸法と実相から説かれていると言えます。それはまた、『華嚴經』に代表される、一即一切、一切即一という、いわば仏法の立て方によっても説かれるものです。たとえば

つぎのような仏の言葉があります。

「無上の法を見ることもなく

百年を生きながらえるより

無上の法を見通して

一日生きる方がまざる」

（『法句』第115偈⁽²⁹⁾）

無上の法とは、九出世間法、すなわち四道・四果・涅槃をさします。つまり無欲の法であります。無上の法をこの一日に知る、今ここに知るべし、ということですよ。

道元禪師もこの言葉を大事にされました。

「古来の仏祖のいひきたれることあり、いはゆる『もし人、生きて百歳あらんも、諸仏の機を会せずんば、未だ生けらんこと一日にして、能くこれを決了せんには若かじ』。これは一仏二仏のいふところにあらず、諸仏の道取しきたれるところ、諸仏の行取しきたれるところなり。百千万劫の回生回死のなかに、行持ある一日は、髻中の明珠なり、同生同死の古鏡なり、よろこぶべき一日なり、行持力みづからよろこばるるなり」

（『正法眼蔵』行持・上⁽³⁰⁾）

と述べておられます。一日の行持とは何か、ということよ

す。この巻の冒頭には、「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず。発心・修行・菩提・涅槃の間隙あらず。行持道環なり」とあります。行持のある一日は、髻中の明珠であり、古鏡とともにある生死である、これが古仏の法だということです。

おわりに

仏の辞世句とされる「いかなるものも移ろい行く。怠ることなく努めよ」という言葉は、四十五年間にわたって説かれた教えと実践のすべてを語るものと解されます。その前半は「無常」の教えを、後半は「不放逸」の実践を示し、「すべては無常である、常に精進せよ」と教えられたものです。仏の言葉、あるいはお経はすべて、ここに原点があろうかと思われます。「無常の世界」とは、私たちの日常の変化して止まない世界であり、喜怒哀楽をくり返す自己の世界であります。が、同時に、この言葉は、私たちがすべての無常を知り、その実相を覚えることによつて、真実のままに、いわば自然のままに、仏のとおり生きて行けることを教えております。その生き方は、常精進にしか

ない、ということでありましょう。不放逸に、正念をそなえ、ただ精進あるのみ、すなわち坐禅、これが仏の、そして私たちの生き方である、ということですから。それが不離叢林、一生不離叢林という意味でありましょう。

「慕古真心 不離叢林 末後端的 坐断而今」という言葉に、「仏の今ここ」を学びたいものであります。

「清聴、有難うございました。」

註

(1) 平成二十年一月五日ご遷化。禅師は兵庫県加古川の福田寺に住まれ、弊師の道友として、昔はよく自坊（赤穂）に足を運ばれていたことが思い出される。

(2) 『正法眼蔵』『重雲堂式』。河村孝道校註『道元禅師全集・第二巻』（春秋社 一九九三年）四八三頁参照。

(3) *vayadhammā saṅkharā, appamādena sampadeṭṭha*. (D.II. 156) 直訳すれば「諸行は壊法である。不放逸に努力せよ」。拙訳『パーリ仏典・長部（ディーガニカーヤ）大篇①』（大蔵出版 二〇〇四年）三三三頁参照。

(4) *aniccā vata saṅkharā uppāda-vaya-dhammino*
uppajjivā nirujjhanti tesāṃ vipasamo sukho.
(D.II. 157)

無常の世界（片山）

前掲拙訳書三二六頁参照。

(5) *sabbapāpassa akaraṇaṃ kusalassa upasampāda*
sacittapariyodapanam etam Buddhāna sasanam.
(Dhp. 183)

この因縁話などについては、拙著『ダンマパダ 全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』（大蔵出版 二〇〇九年）二六六頁参照。なお、七仏通誠偈（三偈）は長部第十四『大譬喻經』第九十節（前掲拙訳書九一―九二頁）にも見られる。

(6) 河村孝道校註『道元禅師全集・第一巻』三四九頁（春秋社 一九九一年）、水野弥穂子校注『正法眼蔵（二）』二四一頁（岩波文庫 一九九〇年）参照。

(7) ちなみに、第二の「七仏通誠偈」はつぎのとおり、忍辱、涅槃、慈悲の教えである。

「耐え忍ぶは最上の修行 涅槃は最上、と諸仏は説く
他を害するは出家にあらず 他を悩ますは沙門にあらず」
(法句184)

Khaṇṭi paramam tapo tikkhā
nibbanam paramam vadanti Buddha,
na hi pabbajito parupaghātū
samāno hoti param vihetvayanto. (Dhp. 184)
また、第三の「七仏通誠偈」はつぎのとおり、戒、食、定を教えるものである。

「罵り害することもなく 根本戒をよく守り

無常の世界 (片山)

食事において量を知り 遠く離れて臥し坐り
また禪定によく励む これが諸仏の教えなり」

(法句 18)

anupavādo anupagghāto patimokkhe ca sanvāro
matāññutā ca bhattasmiñ paṇāṇ ca sayanasānanā
adhicīte ca āyogo ekaṃ Buddhāna sāsanaṃ.

(Dhp. 185)

(8) “sabbe saṅkhārā aniccā” ti yadā paññāya passati
atha nibbindati dukkhe esa maggo visuddhiyā.

(Dhp. 277)

“sabbe saṅkhārā dukkhā” ti yadā paññāya passati
atha nibbindati dukkhe esa maggo visuddhiyā.

(Dhp. 278)

“sabbe dhammā anattā” ti yadā paññāya passati
atha nibbindati dukkhe esa maggo visuddhiyā.

(Dhp. 279)

(9) M.I. 134-135. 拙訳『パーリ仏典・中部(マッジマニカー
ヤ) 根本五十経篇①』(大蔵出版 一九九七年) 三三八-三
五九頁参照。

(10) 中村元・紀野一義訳註『般若心経 金剛般若経』(岩波文
庫) 五四頁参照。

(11) M.I. 161. 拙訳『パーリ仏典・中部(マッジマニカーヤ)
根本五十経篇②』(大蔵出版 一九九八年) 三五頁参照。

(12) S.I. 62. 拙訳『パーリ仏典・相應部(サンユッタニカー
ヤ) 有偈篇①』(大蔵出版 二〇一一年) 二七七-二七八頁
参照。

(13) 大久保道舟訳註『道元禪師清規』(岩波文庫 一九四一
年) 四三頁参照。

(14) 河村孝道校註『道元禪師全集・第一卷』(春秋社 一九
九一年) 一五四-一五五頁参照。

(15) 同『道元禪師全集・第一卷』[道得] 三七六頁による。
水野本は「不道をいともことなかれ」。

(16) 同『道元禪師全集・第一卷』三七六頁参照。

(17) 同『道元禪師全集・第二卷』一八四頁参照。

(18) 大久保道舟訳註『道元禪師語録』(岩波文庫 昭和十六
年) 一三頁参照。

(19) 同『道元禪師語録』一九頁参照。

(20) 和辻哲郎校訂『正法眼蔵随聞記』(岩波文庫 昭和四十
六年) 二九頁参照。

(21) 中村元・紀野一義訳註『般若心経 金剛般若経』(岩波文
庫) 七二頁参照。

(22) 同『般若心経 金剛般若経』六六頁参照。

(23) 坂本幸男・岩本 裕訳註『法華経(上)』[方便品] (岩波
文庫) 六八頁参照。

(24) 『中論』卷第四、大正蔵第三十卷「中観部」三二頁下段
参照。

- (25) 河村孝道校註『道元禪師全集・第二卷』一五頁参照。
- (26) 原田弘道『現代語訳従容録』(大蔵出版)二六頁参照。
- (27) 河村孝道校註『道元禪師全集・第二卷』九四―九五頁参照。
- (28) 同『道元禪師全集・第一卷』一四二頁参照。
- (29) 拙著『ダンマパダ 全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』一六八頁参照。
- (30) 河村孝道校註『道元禪師全集・第一卷』一六二頁参照。
- なお、本稿に関連するものとして、拙稿「禪と経の世界」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第四十四号(二〇一
一)参照。